REPORT
関連イベントレポート

オープニングレセプション

日時：2014.3.1 13:00-15:30
会場：酒游館
ゲスト：日比野克彦／サラ・ロンバルディ／はたよしこ

3名のゲストのほか近江八幡市津村孝司副市長、出品作家の澤田真一さん、古久保憲満さん、富塚純光さんも来場されたオープニングレセプション。特別出展の日比野克彦氏は新潟県で誕生した連綿と続く「種」の物語を、サラ・ロンバルディ氏はアール・ブリュット・コレクションの歴史と日本のアール・ブリュットの魅力について語った。また、NO-MAアート・ディレクターはた氏は多くの日本人アール・ブリュット作家を紹介。展覧会初日にふさわしい盛りだくさんのレセプションとなった。

イメージの力
－
日比野克彦 *Katsuhiko Hibino*

アーティスト。東京芸術大学美術学部先端芸術表現科教授。1958年生まれ。東京藝術大学大学院修了。大学在学中にダンボール作品で注目を浴び、国内外で展覧会を多数開催する他、パブリックアート・舞台美術など多岐にわたる分野で活動中。近年は各地で一般参加者とその地域の特性を生かしたワークショップやアートプロジェクトを多く行っている。

NO-MAで特別展示を行っている日比野氏。今回展示している作品全３シリーズについての解説のあと、「人はなぜ絵を描くのか」という根源的な問いに迫った作品制作のプロセス、その体験によって考えた「アール・ブリュット」について語った。
近年、アートプロジェクトと呼ばれる活動を多く展開している日比野氏は、今回出品した作品が、その連綿と続くアートプロジェクトたちの中からどのように生まれでてきたのか、橋のワークショップが自らの原体験に繋がっていることなどを紹介した。
そして、後半は「人はなぜ絵を描くのか」という問いへ日比野氏がどのようにアプローチしたかを紹介、「イメージの力」に触れる壮大な物語となった。
人類が最初に描いた絵として知られる洞窟壁画。なぜ真っ暗な洞窟の中で絵を描いたのか。それは必然性（人として生理的な欲求がある）だったのか、必要性（人として意識的な欲求がある）に駆られたからなのか。自ら洞窟に入り、暗闇の中で気付いたのは、暗闇だからこそ「“イメージ”が生まれた」のだと。外的な光による刺激とは異なる脳内信号からのもう一つの刺激が人間に“イメージ”を与え、「“イメージ”の力」が手の動きにつながり、必然から絵を描いたのではないか。それは縄文式土器や澤田さんの作品にまでつながっている、と日比野氏。
三宅島の海で、砂漠の中で、岩窟の中で巨大なドロイーングを行い、さまざまな場所でイメージの力を引っ張り出す実験を繰り返した作品を制作。「人はなぜ絵を描くのか」に迫り続けた結果、ある一つの考えにたどり着く。
「アール・ブリュットには人間の能力を目覚ます力が有る。それは絵画的、美術的な領域だけではなく、生活の価値観を変える大きなきっかけになるのではないか」。絵画的・美術的価値観から生まれた言葉の意味に留まらず、他者からアクセス不能な個人の自由を尊重しあうというより高度な価値観を得るきっかけとなる。そういった力をアール・ブリュットが持っているだろう、と力強く締めくくった。

REPORT
関連イベントレポート

講演Ⅰ「NO-MAとの連携展をとおして～日本のアール・ブリュットの魅力を語る～」
－
サラ・ロンバルディ *Sarah Lombardi*

アール・ブリュット・コレクション館長。1972年生まれ。美術史家。アール・ブリュットに関する執筆多数。共著にリシャール・グレーブの展覧会カタログ『アナルシテクト』（アール・アンディシプリネ協会、サナ・コンティナン出版社、2005）などがある。

スイス・ローザンヌのアール・ブリュット・コレクションは世界に先駆けて開設されたアール・ブリュット専門の美術館である。
NO-MAとの関わりは2006年に始まる。ロンバルディ館長はアール・ブリュットの概念、そしてその概念を生んだジャン・デュビュッフェについて深い敬意とともに語った。
彼は精神障害の病院などを訪問し、多くの作品を発見した。それらの特徴を定義付けるために調査を続け、病院に収容された囚人の彫刻などに出会った。アール・ブリュット作家に共通するのは、創造が必要から生まれたという点であり、創造は肉体と切り離せず、一生涯の友となっている、あるいは誰の指示も受けず自分の欲望から制作するものだと。
また、ロンバルディ氏はデュビュッフェの先見の明を讃えた。1976年から約30年間かけてアール・ブリュット作品を蒐集したこと、そのコレクションを一般に開かれた場所である美術館に寄贈すると決めたことは驚くべきことだと。開館時に5千点だった収蔵点数は現在6万点を超え、年間4万人が訪れる美術館となっている。開館から36年を経た現在も、野蛮的、野性的でもあるアール・ブリュットが既存のアートにとって変わることはなかった。しかし、アール・ブリュット作品から刺激を受ける一般の芸術家たちも少なくない。
一方、日本のアール・ブリュット作品もアール・ブリュット・コレクションに収蔵されている。NO-MAおよび事業団との最初の交流から10年近く経った。日本に初めて訪れた際の調査がとても実り多いものであったことを振り返りつつ、かつては研究者など一部の人にしか関心がもたれなかったアール・ブリュットが、芸術的価値を認められ、その概念も日本に浸透しつつあることは喜ばしいと述べた。今後もNO-MAとの協働プロジェクトは継承されていくだろう。

講演Ⅱ「日本のアール・ブリュット」
－
はたよしこ *Yoshiko Hata*

ボーダレス・アートミュージアムNO-MAアートディレクター。1949年生まれ。『私あるいは私』『快走老人録　～老ヒテマスマス過激ニナル～』などを企画。西宮市にある知的障がい者支援施設「武庫川すずかけ作業所」にて絵画クラブを主宰。

戦後間もなく孤児の保護・教育を目指して設立された近江学園。偶然にも、信楽粘土が産出する地域であり特に粘土を使った造形活動が発展し現在のアール・ブリュットの広がりにまで続いている。それらの活動が「言葉で伝えられないことを、粘土に託して伝える。プリミティブな部分からはじまった。-略-今から思えば斬新な活動が滋賀からはじまった」と語った。
2002年に開催した『DANCING　CLAY　土踊る-アウトサイダーアーティストと鯉江良二』展。「なんとかこのような造形表現、言葉のかわりというものがアートであるというコンセプトをまず一つ形にしたい」という想いが込められていたという。プロのアーティストの作品と後にアール・ブリュットと呼ばれる作品を意図的に並べて展示した機会であり、「表現へのエネルギーを潜ませている粘土を使って、インサイダー／アウトサイダーの区別がつかないというのを展示した」展覧会だった。

作家紹介では、宮間英次郎、鮒万里絵、澤田真一など本展に出品中の作家を中心に、はた氏がこれまでに出会った日本全国の作家が作品写真とともに数多く紹介された。

REPORT
関連イベントレポート

講演Ⅰ／Ⅱ

日時：2014.3.8 13:00-15:00
会場：酒游舘
ゲスト：ローラン・ダンシャン
岸 桂子

3月1日の講演に続き海外からのゲストが登場。レセプションに登壇いただいた、サラ・ロンバルディ氏が館長を務めるアール・ブリュット・コレクションの理事ローラン・ダンシャン氏を迎えた。初来日となる本講演では、氏の膨大な研究から多くの事例紹介とともに現在のアール・ブリュットに対する考察、日本におけるアール・ブリュットの特徴など多くが語られた。また、長年NO-MAの取材にも携わってこられた岸桂子氏からは新聞記者の視点からみたアール・ブリュットについて紹介いただいた。

講演Ⅰ「ヨーロッパのアール・ブリュット」

－

ローラン・ダンシャン *Laurent Danchin*

アウトサイダーアート専門雑誌「RAW VISION」特別顧問、アール・ブリュット・コレクション理事。ヨーロッパのアール・ブリュットの研究、発信に尽力し、美術館や大学などでの講演多数。多くの人に読まれ続けている『アール・ブリュット』の著者でもある。現在、アール・ブリュットの新刊を執筆中。

多くの事例紹介、考察、問題提起など貴重かつ膨大な内容が凝縮された講演となった。
日本のアール・ブリュット作品がフランスで人気を博した理由について。1つは「日本のアール・ブリュット」という呼称が逆説的な効果を与えている点。欧州からみた日本文化は洗練されたイメージがあるが、アール・ブリュットは荒削りである。2つ目に、日本独自の特徴を持っていたこと。アール・ブリュットとは何か、という問いが新たに生まれた。最後は欧州にはなかった知的障害者の創作活動における問題を欧州に持ち込んだ点であると言及した。
公立美術館やマーケットによる認知、第55回生ヴェネチア・ビエンナーレでの選出などヨーロッパにおいては流行とさえ言える状況がある。しかし、現代美術がアール・ブリュットを受け入れたことによる混同や混乱について考えるには、デュビュッフェが生み出した概念・原点に立ち戻ることが重要だという。
最後に、アール・ブリュットの定義についてダンシャン氏の持論を提示。1点目に非学識的、アカデミックな技法の習得なしで創造されるものであること。もう1点は、何かの力に突き動かされ、一種の強迫観念や霊感を受けたような美術であることを挙げた。

講演Ⅱ「新聞記者が見た〈NO-MA〉以後のアール・ブリュット」

－

岸 桂子 *Keiko Kishi*

毎日新聞学芸部記者として、NO-MA開館当時より取材を続ける。関西在任中は身体や精神に障害を持つ人々の芸術表現やそれを取り巻く流れを様々な活動や施設に取材。現在は東京の学芸部において主に美術関連の取材を担当。2013年には、澤田真一さんのヴェネチア・ビエンナーレの記事も執筆した。

記者歴20年の岸桂子氏は大阪本社勤務時代にNO-MAの取材を多く実施。長年の取材・執筆活動から見たNO-MAの活動を振り返った。「ボーダレス」という言葉の重要性を感じたのは、開館記念展『私あるいは私』だったという。著名なプロの作家とアール・ブリュット作家が同時に展示されていることに驚きを覚えた。その後、日本のアール・ブリュットが国内のみならず、スイス、フランス、イギリス、イタリアと日本のアール・ブリュットが世界へ躍進してきた過程はNO-MAなしでは語れず、現在もその存在感を感じていると語った。

REPORT
関連イベントレポート

講演Ⅰ／Ⅱ

日時：2014.3.15 13:30-16:00
会場：酒游舘
ゲスト：マルティーヌ・リュザルディ
保坂健二朗／嘉田由紀子
黄榮村

2010年『アール・ブリュット・ジャポネ』展を開催したパリ市立アル・サン・ピエール美術館からマルティーヌ・リュザルディ館長を招いた3回目の関連イベント。「新しい美術館のかたち」と題し、リュザルディ氏と保坂健二朗氏にヨーロッパと日本それぞれにおけるアール・ブリュット作品の扱われ方について持論を展開いただいた。また台湾前文部大臣黄榮村氏には台湾の障害者芸術に関する活動を、嘉田由紀子滋賀県知事からは滋賀の美についてそれぞれご紹介いただいた。

講演Ⅰ「新しい美術館のかたち～アール・ブリュット作品を美術館があつかうこと～」

－

マルティーヌ・リュザルディ *Martine Lusardy*

パリ市立アル・サン・ピエール美術館館長。アール・ブリュット、アウトサイダー・アート、フォークアート分野のリーダーとして50以上の展覧会でキュレーターを務め、また数多くの図録出版も手がけている。観覧者数12万人を記録した『アール・ブリュット・ジャポネ』展（2010年）の企画を担当。

まずは「私からみなさんに“知識”を与えるのではなく、私の（アール・ブリュットに対する）“考察”を紹介する」講演であることを表明したリュザルディ氏。アール・ブリュットのおかれた状況や、自身が考える定義などを語った。
アール・ブリュットという概念が誕生してから長い時間を経て、現在では専門の美術館、ギャラリー、展覧会、雑誌、フェアなどが存在するまでになった。現代アートと並べて展示される機会が増え、マスコミにもてはやされ、地理的な広がりも拡大しているという。
リュザルディ氏が考える「アール・ブリュット」について、大きく4つに分けて紹介された。1つは、アール・ブリュットは開かれた領域であり普遍的なものであるということ。ヨーロッパでは精神病患者や霊媒系のアーティスト、アメリカはフォークアートにルーツを持つなど、国や地域における特徴もある。日本では障害者の社会的地位の向上と結びついていることが特徴的だという。
2つめに、アール・ブリュットにおける創造は実に特殊なものであること。どんな芸術分野にも属さず、他人の視線も気にしない。しかし周囲の影響をまったく受けないのではなく、時代や文化に影響を受けながら、強い欲求に駆り立てられて創造しているのだという。
3つめに、彼らが参考にする文化は学校で教えているものでも、美術館が評価しているものでもないという点。拾って来た建材で小屋を作ったり、膨大な数の石像を作ったり。それらは、自分のためだけにあって、観光客を呼ぶために作られたわけではない。「一つの作品をつくるために生涯を捧げた」のだと。
そして最後に、アール・ブリュットを美術館で展示・収蔵することについて。もともと美術館に飾られるため、人に見せるために作られたのではないものを、美術館に入れてしまうことでアール・ブリュットの批判性・反逆性が取り除かれてしまうのではないか。また、現在の美術における審美的な基準を当てはめて評価すること、治療として制作された作品をすべてアール・ブリュットと呼ぶことについての危険性が指摘された。専門家だけでなく、今後、広くアール・ブリュットに関する議論が行われることの重要性を唱えた。

REPORT
関連イベントレポート

講演Ⅱ「新しい美術館のかたち～アール・ブリュット作品を美術館があつかうこと～」

－

保坂健二朗 *Kenjiro Hosaka*

本展アーティスティックアドバイザーを務める。
（詳細プロフィールは→P18参照）

アール・ブリュットを美術館であつかうことに対して、さまざまな意見がある中で、前向きに考えていくことを提案した保坂氏。その作品が人に見せるために作られていなかったとしても「それが優れたものであれば見たい」。倫理観が無い、悪い事をしていると思われたとしても、それを補ってあまりある価値があると考えてアール・ブリュットを扱っている。それはまた美術館においても同じように考えてよいのではいないか、と語った。
専門家は、保存・批評が困難、歴史的な評価がないなど扱いが難しいと考えるだろう。しかし、「美術」という枠組の外側にあるアール・ブリュットを美術館で展示、コレクションすることでおこる変化の一つに、キュレーター本来の在り方に立ち戻ることが挙げられるという。なぜなら、美術館における既存の「作家選定システムから自由になれる」からだ。過去の実績、略歴ではなく純粋に作品の善し悪しで選ぶことになる。
日本にはフランスやスイスのように大規模なアール・ブリュット作品のコレクションが存在しない。その中で全国に先駆けて県立近代美術館にアール・ブリュットを収蔵することが決まっている滋賀県。賛否両論、さまざまな意見を耳にするが、規模は小さくとも優れたディレクターやキュレーターの存在があれば可能性は広がる。滋賀から新たな美術館のありかたが提示できるのではないか、など滋賀県への期待が込められた講演となった。

「台湾の障害者芸術に関する活動について」

－

黄榮村 *Jong-Tsun Huang*

台湾前文部大臣。中国医薬大学（台湾）神経科学認知科学研究所教授、台湾中国医学教育学会会長。実験心理学博士。

本展には台湾のアール・ブリュット作品も出展されている。過去に行った台湾での作品調査（滋賀県アール・ブリュット推進事業）がきっかけとなり交流が続いている。黄氏は、社団法人台湾心身障害芸術発展協会の活動を紹介。主には心身障害者の芸術の創作と育成や展覧会の運営を行っている。また本展出品作家も所属する「光之藝廊」（アートスペース）についても紹介された。「光之藝廊」に所属する作家は台北を中心に台湾国内で39名。年齢も15歳～62歳までと幅広い。今回は、本展に出品している作家数名も来日され、交流を深めた。

「滋賀の美について」

－

嘉田由紀子 *Yukiko Kada*

滋賀県知事。京都大学大学院・ウイスコンシン大学大学院修了。農学博士。琵琶湖博物館総括学芸員、京都精華大学人文学部教授を経て、2006年に滋賀県知事に就任。現在2期目。著書多数。

滋賀県における造形活動の基礎を作った糸賀一雄が2014年に生誕100年を迎える。また、滋賀県では「美の滋賀」「新生美術館」などアール・ブリュットを支え、発信する仕組みづくりが続けられている。嘉田知事は初めて澤田真一さんの作品に出会ったときに心を動かされ、その後数々の作家に出会う中でだんだんとアール・ブリュットの世界に引き込まれたという。また、新生美術館において新たな柱となる滋賀県の仏教美術の素晴らしさ、近江の人々がどのような想いで神社を守ってきたのかなど、風土の中から生まれた近代の美について語られた。

VOLUNTEER
ボランティア

ボランティアスタッフの活躍

全8会場を使って開催した本展では、各会場の設営から会期中の受付などボランティアスタッフが重要な役割を果たした。地域住民だけでなく、周辺地域、県外からの応募があり、高校生、大学生、町屋保存会、養護老人ホーム入所者、親子での参加など年齢も立場もさまざまな人々がアール・ブリュットの魅力発信に奮闘してくれた。以下はボランティアスタッフの活動に関するまとめである。

ボランティアスタッフとして参加いただいた方　61名
年齢は10代～70代以上までと幅広く、近江八幡市内を中心に滋賀県内、県外からも参加いただいた。

［活動内容］
鍵の開錠/施錠、館内清掃、展示作品の安全確認、展示説明、パスポートチェック、会場監視、パスポート等の販売、車椅子補助、筆談等による鑑賞のお手伝いなど

［ボランティアスタッフ活動日誌］
各会場で受付をするスタッフは、毎日「ボランティアスタッフ活動日誌」にその日の来場者数や、来場者の反応、提案などを書きとめた。日誌には積極的に活動に関わる姿や、たくさんの来場者の声がアーカイブされていった。以下、一部を抜粋し掲載する。

- すごいねぇ、すごいねと同意を求められる方がおられ、本当にすごいですね、と思わず言っていました。お客さんと共感できてうれしい!!
- 雨が降るなか、余呉町や兵庫県西宮市、さらには日比野克彦さんのご紹介で福岡県太宰府市からはるばるお越しいただいた方もおられました。
- テレビで見て、どうしても来たいと言って来られた、奈良からのご夫妻にはうれしくなりました。
- 解説つきで見ると見方が変わっておもしろいと仰っている方がいました。
- 左義長の行列のタイミングが重なった来訪者が楽しみながら見学されていました。
- NHKの放映を見て来られた方が、数組ありました。
- 受付とは別に、アンケートを記入できるスペース（小さな机）を用意しても良いと思う。
- 外国人もおられたのでアンケート用紙に英語版も用意していただけると対応しやすくなります。
- 古いついたてや机、はしごなどを利用した展示にもとても関心されてました。
- 年配の女性3人組で来られた方たちが、どの作品も「おもしろいね～」ととても楽しそうに見ておられていて賑やかでした。他の美術館では「静かに観る」という感じですが、お友達同士で感想を言い合ってワイワイ観られるのがこういう展覧会ならではだなあと感じました。
- 車椅子の方がご来場下さりましたが、支援スタッフ（障害のある方、お年寄りから希望がある場合に車椅子補助、筆談等をするボランティアスタッフ）やその場にいた方々の協力もあって展示会を楽しんでいただけました。

VOLUNTEER
ボランティア

スタッフの声

「ボランティアスタッフに参加した動機」「参加してどうだったか」など、感想を聞いた。
全スタッフのうち、8名の声を紹介する。

西川好信 *Yoshinobu Nishikawa*（60代）
皆さんの温かい手助けがあって終えることができました。旧吉田邸のとんぼの（小原久美子さんの）作品に吸い込まれそうでした。入った途端に自分が飛んでいくような感じで、とんぼが自分を連れて行ってくれる様で非常に感動しました。

園田若菜 *Sonoda Wakana*（20代）
生まれも育ちも近江八幡ですが、このあたりには足を運ぶことがありませんでした。活動してみて、普段話すことがない人たちとお喋りできて、楽しく有意義な時間でした。障害のある方がつくるアートという目線ではなく、一つの美術としてみる大切さを知ることができました。

大橋利子 *Toshiko Ohashi*（60代）
一番良かったのは、若い方やお年を召した方といろいろお話できたことです。今まで家にずっといたんですが、外に出ることが楽しみになってきて、どなたとでも喋れるようになれたらと思っていたので嬉しかったです。また参加させてください。

村松和美 *Kazumi Muramatsu*（60代）
近江八幡出身ですが、旧市街を歩くことはなく知らないことばかりでした。いろんなところをみせていただいて、八幡の魅力に気が付きました。シルバー人材センターでたまたま紹介してもらいましたが、こんな素晴らしい世界があるんだなと感じました。スタッフやボランティアの方々とお知り合いになれてすごく幸せでした。

VOLUNTEER
ボランティア

久木　茂 *Shigeru Hisaki*（60代）
レイカ34会は滋賀県レイカディア大学（シニア向けの学び場）のOBOG会です。その仲間達と一緒に奥村邸の庭を整備したり、一般公開のお世話をしています。その活動を知る事業団の方からお誘いをいただき、期間が長いので心配でしたが関われるメンバーを集めて参加しました。期間の半分くらいは奥村邸の担当を我々でまわしています。アール・ブリュットのことは、大学で言葉を知った程度で詳しくありませんが、作品のすごさは見れば見るほど強く感じるようになってきました。作品だけでなく、庭や建物にも興味がありそうな来場者には声をかけていろいろな説明をしています。

岸本琴音 *Kotone Kishimoto*（20代）
大学院では児童文学におけるこどもや障害のある人の居場所について、ある作家の作品を軸に研究したいと考えています。以前、NO-MAで展覧会を見たときに、障害がある人もそうでない人もそれぞれの作品を等しく展示していて、（誰にでも）居場所があるということを漠然と感じ、研究テーマにも繋がるのではないかと興味を持って関わっています。展示空間の使い方なども素敵だなと。今回だけでなく今後も機会があれば参加したり、お手伝いしたり関わっていきたいです。ボランティア業務も楽しんでいます。作品の説明の仕方は学芸員のみなさんの説明を参考にしています。

松本理紗 *Risa Matsumoto*（10代）
春から看護学校に通うのですが、春休みの間に何か地元でボランティア活動をしたいと思って探していました。せっかくだから学校では学べないようなことを体験しようと。好きな小説に登場する図書館司書や、美術館の美しい監視員に憧れもあったのも応募したきっかけの一つです。展示されている作品を見て、「すごい！これは絶対普通じゃ描けない」と驚きました。近江八幡のことはずっと大好きです。でもNO-MAのことも、町屋のことも何も知らず、今回たくさん教えていただきました。大学生の方とか同じスタッフだけど全然立場の違う方とお話できるのも楽しいです。

武田真也 *Shinya Takeda*（50代）
NO-MAとは2009年の「八幡山に天狗を探せ！」からなので、長いおつきあいです。ボランティアには、関係者からお声がけいただいて参加しました。今回の企画はとても素晴らしい。例えば、展示の仕方。学びや発見を生み出す工夫が随所にこらされている。作品の見方について来場者に簡単なヒントを出すだけで発見や驚きが増して喜ばれます。また地域との関わりも、今回のような取り組みを続けていくことはとても重要だと感じています。たくさんの方が遠くからNO-MAにも街にも訪れるとか、街のこどもたちにもっとNO-MAを知ってもらえる工夫をするとか。いろんな取り組みを続けていってほしいです。

REVIEW
展覧会レビュー

公開研究会研究員によるKPT法を用いた展覧会レビュー

アサダワタル *Wataru Asada*
日常編集家

町屋の間取りや庭の植栽など既存の条件を活かし、戸棚などの古道具を什器として使ったり、場所の特性に合わせて新たな什器をつくったり、そのバランスが興味深かったです。一方で、元来展示のための空間で比較的フラットな展示構成をとっているかわらミュージアムに行ったとき、不思議と落ちついた感じがして、そういう場所があったこともよかったです。

竹内 厚 *Atsushi Takeuchi*
Re:S 編集者

NO-MAに並べて展示された日比野克彦さんと林瑋萱さんの作品が、はじめは別の作家だと気づかず、日比野さんご本人ならではのキュレーションだなと興味深く見ました。ただ、NO-MA全体では作家ゆえのキュレーションが全面に出ていて、それがおもしろくもあり、悩ましくもあり。鈩さん、吉田さん、金崎さんなど個展のように独立した空間は、特に見応えがあって、展示にも学芸員の強い思い入れを感じました。

早川弘志 *Hiroshi Hayakawa*
社会福祉法人やまなみ会 やまなみ工房 主任支援員

地域の方が会場ボランティアをされていたり、子どもが立ち寄ったり、身近な場所というのがよかったです。それでいて展示のクオリティが高く、見ごたえのある展覧会でした。ただ、ほかの展示がしっかりしているだけに尾賀商店の映像は物足りない印象でした。外光で映像が見づらく、寒さもあり、ゆっくり映像を見ようという気にはならないと思いました。

近藤隆二郎 *Ryujiro Kondo*
滋賀県立大学 教授

前回展覧会よりも、制作のプロセスがわかるような展示が多くてよかったと思います。古久保さんの作品などは前回も展示されていて、次はどこまで延びるかなと、作品を完成品ではなくプロセスが内在している状態で付き合えるのはよいですね。ケースに入れていない作品も多く、作品は本当にすべて触れてはいけないものか、という疑念が湧きました。

鳥井新平 *Shinpei Torii*
近江兄弟社小学校 教諭

視察はNO-MAからでしたが、入った途端に質が高いなと、ガピーンといい感じが響いてきました。澤田さんの少女のようなしなやかな長い指、日比野さんの伝言ゲームのズレや即興性、林瑋萱さんの聴力障害による読唇、それぞれ身体器官を使った特徴が出ておもしろいと思いました。他の会場も町屋の味がしみ出していて作品や企画と響き合っていたと思います。

山口真有香 *Mayuko Yamaguchi*
滋賀県立近代美術館 学芸員

普段、私たちは（美術館で）非常にフラットな空間で見やすく展示をしますが、今回の展覧会では額の裏から作品の人形が顔を出していたり、飛行機の絵も下には1枚だけで他は上に展示したり、「探す楽しみ・見つけた嬉しさ」が散りばめられた町屋の特性を活かした展覧会でした。また、座って低い視点で見せる町屋ならではの工夫なども非常によかったと思います。

公開研究会

Study

日本において近年、アール・ブリュットはにわかに注目を集め、各方面から一目を置かれています。美術、福祉、医療、教育、観光、まちづくりなど、様々な分野と親和性の高いアール・ブリュットですが、市民レベルではさらに認知度を高めていく必要があり、その評価についても各分野において統一的な見解が定まっていないのが現状です。その魅力や秘めた力は、いずれの分野においてもまだまだ開花の余地を残している状況です。
公開研究会では、アール・ブリュット魅力発信事業（以下、本事業とする）における3つの展覧会について多面的な視点で検証、アール・ブリュットの魅力や可能性、それらを発信するための効果的な手法について活発な意見交換がなされました。研究会の成果として明確で画一的な評価軸を設定しようとするものではなく、さまざまな視点からアール・ブリュットの魅力発信を推進するための糸口を見いだすことを目的に実施したものです。
7名の研究員による研究成果を38〜45ページに研究会事務局がまとめました。

［研究員］
7名（詳細プロフィールは37ページを参照）／アサダワタル（日常編集家）、近藤隆二郎（滋賀県立大学教授）、末安民生（日本精神科看護技術協会会長）、竹内厚（Re:S編集者）、鳥井新平（近江兄弟社小学校教諭）、早川弘志（社会福祉法人やまなみ会やまなみ工房主任支援員）、山口真有香（滋賀県立近代美術館学芸員）

［開催概要］

第1回 日本のアール・ブリュットに関連する取り組みの流れをふりかえる
□日時：12月12日（木）15：00〜17：00　□場所：ピアザ淡海205会議室　□一般聴講者：8名
□実施内容
・「アール・ブリュット ゾーン パルコ」展の視察およびKPT法※によるレビュー
・日本におけるアール・ブリュット関連の取り組みの振り返り
・アール・ブリュットについて、またその発信手法について疑問や課題を整理
※KPT法…意見や感想をKeep：維持すべき良いところ、Problem：問題となっている良くない点、Try：今後の改善手法、の3つに分類して整理する手法

第2回 発信すべきアール・ブリュットの魅力と今後の発信手法に関するアイデア
□日時：2月9日（日）10：00〜13：00　□場所：大津プリンスホテル コンベンションホール淡海10
□一般聴講者：76名
□実施内容
・「アール・ブリュット ランドスケープ －創造のカタチを一望する－」展の視察およびKPT法によるレビュー
・「発信すべきアール・ブリュットの魅力」とは何かについての意見交換
・多様な主体によるアール・ブリュット関連の取り組み事例発表と研究員による考察
・アール・ブリュットへの手紙発表
・効果的な発信手法についての意見交換

第3回 アール・ブリュットの魅力をさらに効果的に発信するための手法
□日時：3月12日（水）9：00〜12：00（展覧会視察およびレビューは3月11日（火）に非公開で実施）
□場所：アンドリュース記念館　□一般聴講者：24名
□実施内容
・3回の展覧会レビューや、さまざまな事例、制作現場見学などを踏まえて発信手法について議論
・新たなアール・ブリュット魅力発信企画をまとめる

制作現場見学の実施
□日時：2月20日（木）・25日（火）・27日（木）13：00〜15：00　□場所：社会福祉法人やまなみ会 やまなみ工房

研究員プロフィール（敬称略／五十音順）

Profile

アサダワタル
日常編集家
1979年大阪府生まれ。公私の狭間、異分野間を漂泊しながら、既存の価値観を再編集する表現を、音楽、文章、プロジェクトを通じて創作する。2002年から音楽活動を始め、2003年以降は活動を"音"から"場／事"に拡張。様々なスペースの運営、地域コミュニティに関わる音楽ワークショップなどに従事。2013年、ドラムを担当するSjQ++にてアルスエレクトロニカ準グランプリ受賞。著書に『住み開き 家から始めるコミュニティ』（筑摩書房）、『アール・ブリュット アート 日本』（平凡社、編著）等。神戸女学院非常勤講師。「美の滋賀」アドバイザー。

近藤隆二郎／こんどう りゅうじろう
滋賀県立大学 教授
1965年東京都生まれ。大阪大学大学院工学研究科（環境工学専攻）、和歌山大学システム工学部を経て現職。専攻は環境社会システム。人間・社会・環境の結びつきを、文化やイメージを鍵としてシステム化し、市民参画デザインとして再構築することを目指して研究実践している。人間社会と環境との絡み合いに関心があり、写し巡礼地・インド都市巡礼・熊野古道・蛇伝説・エコビレッジなどについて調査研究と実践を進めてきたが、現在は五感と身体から感じるまちづくりや身体計画論を構想する。

末安民生／すえやす たみお
日本精神科看護技術協会 会長
1954年鹿児島県生まれ。都立松沢病院に13年間勤務後、衆議院議員政策秘書をつとめる。看護師として地域のメンタルヘルスに関わり、慶應義塾大学准教授を経て、現在は天理医療大学教授。渋谷区で、障害者就労支援活動を行うNPO法人の理事長も担う。これまでの活動の過程で精神障害者の「表現」と出会い、アール・ブリュットに関心を寄せる。2013年に設立されたアール・ブリュットの振興を目的とした全国的なネットワークの副会長に就任し、その普及振興に取り組む。

竹内 厚／たけうち あつし
Re:S 編集者
1975年兵庫県生まれ、大阪育ち。京阪神一円のカルチャー情報誌『Lマガジン』休刊にともなって、2010年から「Re:Standard=あたらしい"ふつう"を提案する」をコンセプトに、さまざまな活動をつづける編集事務所『Re:S』へ。地元のカルチャーまわりを中心に編集＆執筆。聖地探索ユニットfernich、京都造形芸術大学ULTRA　FACTORYでのBYEDITディレクターなどの活動も行う。近年はアール・ブリュットにも関心を寄せ、関連原稿執筆も。

鳥井新平／とりい しんぺい
近江兄弟社小学校 教諭
1957年北海道生まれ、大阪育ち。アートと絵本をこよなく愛す小学校教員。近江ヘイヘイ絵本部屋、太子ホール・クリスマスライブ主宰。地域社会の中で生活の中から、表現活動を通して人を開けつないでいくことをライフワークとして考える。ボーダレス・アートミュージアムNO-MAでは地域交流プログラムのアドバイザーの経験あり。また、バンド「ありらん食堂」のリーダーとして、メッセージ性のある歌の伴奏をつとめる。

早川弘志／はやかわ ひろし
社会福祉法人やまなみ会 やまなみ工房 主任支援員
1971年三重県生まれ。2000年よりやまなみ工房に支援員として勤務。2008年からアトリエころぼっくる班の担当となり、絵画や陶芸を中心とした制作活動の支援、各種展覧会の企画や公募展の出展、グッズ制作等、マネージメントを行う。様々な"表現"が人を繋ぐきっかけとなり人生がより豊かなものになるよう、誰もが共生できる社会づくりを目指し活動する。

山口真有香／やまぐち まゆこ
滋賀県立近代美術館 学芸員
1977年京都府生まれ。関西学院大学大学院文学研究科（美学専攻）博士後期課程単位取得退学。これまでに企画した展示は「日本絵画　組み合わせの美」（2012年・滋賀県立近代美術館）「おでかけミュージアム・キャラバン滋賀のアール・ブリュット」（2013年・県内3会場を巡回）など。専門分野は日本美術史。

Love Letter & Break Up Letter

アール・ブリュットへの手紙

研究会では、アール・ブリュットの魅力発信の手法を検討する上で、そもそもアール・ブリュットの魅力とは何かを検討しました。この検討においてラブレター＆ブレイクアップレター法※という手法を用い、各研究員にアール・ブリュットに対する私的な思いを手紙という形でしたためていただきました。ここでは、そんな手紙の一部を抜粋してご紹介します。

※本来、特定の「製品」を擬人化して個人的な手紙を書いてもらうことで、書き手がその「製品」に対しどのような価値を感じ、何を期待しているのかを探るために用いられる調査手法。アール・ブリュットの魅力に関する議論の糸口をつかむ目的で、今回その手法を応用し「アール・ブリュット」に宛てた手紙を書いていただきました。

Letter.1

竹内 厚

アール・ブリュット氏のことを話したり、記事を書いたりするたびに、面倒だなという気持ちを覚えます。アール・ブリュットとは……という説明や定義を、どうしても先にしておかなければいけない。伝えたいことはその先にあるから話をトントンと運びたいのに、入り口にある小さなハードルが流れに棹さすところがあります。美術の領域でいえば、たとえば、インスタレーションだって、いまだに「インスタレーション（空間構成）」と書かれることもありますし、テレビでラグビー中継を見ていると、ノックオンという基本ルールの説明が相変わらず繰り返されていたりして、専門用語を使うには、かったるい手順は避けられないものなのかもしれません。だとすれば、アール・ブリュットの説明も、「アール・ブリュット（生の芸術）」とでも書いてさっさと終わらせたい。のに、どうもそれでは通りすぎられないところに、アール・ブリュット氏の厄介があります。

Letter.2

早川 弘志

私は今も貴方の事がよく分かっていません。これからも深く分かろうとしないかもしれません。でも、今分からなくても、これからも迷い考えたとしても、そばにいる人たちが幸せかどうか彼らの立場になり考えるという原点に立ち返れば自ずと自分が進むべき道や責任、その答えは見えてくるのだと思います。
いつか、貴方を語らなくても当たり前のように彼らや彼らの作品が、正しく認知される社会、枠組みを必要としない本当の共生社会が実現された時は、貴方ともお別れになるのかもしれませんね。その日が来ることを願います。

Letter.3

アサダ ワタル

アール・ブリュットを受け取ったとき、こういうことをやらんとあかんのじゃないかなということを思ったのが、僕の手紙です。

高校時代に所属していたブラスバンド部パーカッションパートの交換日記帳。あるメンバーの日記に、他のメンバーからの「突っ込み」がびっしりと書き込まれている

Letter.4

近藤 隆二郎

さて、私がみなさんの作品にふれたときに、その繰り返しのリズム、そして表現というよりは、自身をたたきつけるという行為にも目を見開かせられるのですが、私自身の子ども時代に描いていた絵を思い起こすことになります。
小学校からメカ？の絵が好きで、とくにロボットの絵を何枚も何枚も描いていました。実に幸運にも残して、それを今見ても、何がどう違ってこんな同じようなものを何枚も描いていたのかなーと不思議に思っています。ただ言えることは、何も考えずただひたすら描くのが楽しくてしょうがなかったというおぼろげな記憶です。

Letter.5

末安 民生

君の絵の、最初の線はどこから描きはじめたの？
君の描いた、短く不揃いの太かったり細かったりするこの線たち。
この線たちは、なぜクロスすることなく描き続けられたのだろう。
色をもつものももたないものも、色をもつような印象があるよね。
色がないのに色があり、色があるのに色がないような感じがする。
ひとつの画面の中なのに一本の線がひとつの画面のように見える。
平面なのに立体で厚みがあったり薄く感じられたり不思議な世界。
ねえ、君は絵の最初の線は、いったいどこから描きはじめたの？

Letter.6

鳥井 新平

わたしゃ あなたに惚れました。
図工の時間に教材屋さんにセット注文するのをやめて枝を拾ったり、紙を集めたり、、、、身近な素材で安く気楽に、モノをつくる喜びしりました
アール・ブリュットの作品の前に立つと、相性のあう作品からは生きるパワーを注がれ時にハートをわしづかみにされて、表現の神さんがこちらにもおりてくる
（中略）
アール・ブリュットさん、あんたの中には息苦しさを解放するヒントがいっぱいつまっている
アール・ブリュットさん、あんたの中には評価や評判とは無縁の存在感が鳴り響いている

Letter.7

山口 真有香

私は、あなたという相手のことがよく分かりません。
ですので、いろんな本を読んだり、展覧会を拝見したりしています。
けれども、読んだり見たりすればするほどますますよく分からなくなります。
不思議です。不思議ですが、それもまた面白いと感じてしまうのです。
本当に不思議です。
いつまでも、不思議なままでいてほしいような気も、
すっかりあなたのことを知りたいような気もします。
この気持ちがある限り、私はきっとあなたのまわりを、
ぐるぐる、ぐるぐると歩き回るのでしょうね。

About Art Brut

アール・ブリュットの魅力とは

各回の展覧会レビューではアール・ブリュットの魅力について多くの発言がありました。また、第2回公開研究会では、ラブレター＆ブレイクアップレター法をきっかけにアール・ブリュットの魅力について語られました。これらを元に「アール・ブリュットの魅力」について以下に簡潔に整理します。

まず、アール・ブリュットの魅力として第一に作品そのものの魅力があります。ゆるぎない表現、そして隠されている無数の可能性と力。エネルギーに満ちあふれた作品が多く、作品と対峙した時に強い衝撃や圧倒される感覚に襲われることも少なくありません。「体の中からううっと、自分の中で声が上がってくるんですよ。いい物を見たときに必ずそうなるんだけど、うなり始めるんです、自分の中の魂みたいなものが」と鳥井研究員は第2回の展覧会レビューでこのように表現しています。またアール・ブリュットと呼ばれる作品群の中には可憐で繊細な作品も含まれ、芸術の一分野という点においても多様性に富み、バラエティ豊かな作品を包含しています。

そして、次に末安研究員や山口研究員のレターに共通しますが、「なぜ？どうして？」「どんなふうに？」という疑問や不思議に思う気持ちにかられることもアール・ブリュットの特徴でしょうか。得体の知れない、どこかつかみ所のない「神秘性」も魅力のひとつで、山口研究員の「不思議ですが、それもまた面白いと感じてしまう」という言葉に象徴されています。

アサダ研究員や近藤研究員のレターからは、芸術作品としての魅力もさることながら、自らの幼少期の創作の記憶や、高校時代のコミュニケーションノートなど、無垢のふるまいを想起させられることがアール・ブリュット特有の魅力としてあげられます。また、近藤氏はそれについて「生の芸術には生の鑑賞も必要ではないかということです。（中略）つまり、作品として見るのではなくて、その描くという表現行為について学ぶのです。私が子ども時代の無垢な？絵画行為を想起したように、アール・ブリュットからは、評価などを考えないただ単なる表現行為としての身体行為を学びたいのです」とつづり、作品の向こうにある作家や、さらにはその行為へ興味や関心が向けられています。アール・ブリュットは、何かを表現することよりも、もっと根源的な人間の行為や衝動の結晶と捉えることができ、その純粋さが大きな魅力だと言えます。

そして、竹内研究員からはそもそもの「アール・ブリュット」という言葉について投げかけがありました。作品や作家の魅力をストレートに伝えたいのに、「アール・ブリュット」と称することで煩わしい説明を伴うもどかしさがあります。一方で、制作の現場に寄り添う支援員である早川研究員は、アール・ブリュットという言葉の定義への戸惑いをいだきながらも「そばにいる人たちが幸せかどうか」という物差しを持ち、作品が持つ神秘性や純粋さといった魅力が広く認知され、いずれ本当の共生社会を実現する可能性があることを示唆しています。

Field Report

現場見学－やまなみ工房

第2回公開研究会で、アール・ブリュット作品の背景にある作家や、作家の日常生活へ関心が寄せられたことをきっかけに、早川研究員が主任支援員を務めるやまなみ工房を訪ねました。やまなみ工房は、甲賀市甲南町にある知的障害者らが通う福祉的就労および地域生活支援の施設で、6つのグループに分かれて活動をされています。そのうち、粘土や絵画に取り組む「アトリエころぼっくる」、刺繍や織りに取り組む「こっとん」など造形活動に取り組むグループを中心に見学しました。また付設されているギャラリー「gufguf」も見学、最後は利用者の方が給仕サービスをする喫茶「hughug」でコーヒーをいただきました。

自由にのびのびと創作に取り組むアール・ブリュット作家たち。机上の作品としっかり向き合い黙々とつくる人、気のおもむくままに室内を歩き回っていたかと思うと突如ペンを持ち描き始める人、1人だけの空間で床に寝そべって墨の伸びを楽しむように割り箸で描く人、自分の作品を頭上に掲げて歌い踊る人…、そのスタイルは本当に多様です。
早川研究員に施設内を案内していただき、それぞれ利用者の日常の様子や創作に関する特徴について説明を受け、コミュニケーションが可能な方にはご本人から直接お話もうかがいました。この時の早川研究員や施設職員の方が利用者に対して非常にフランクでフラットなコミュニケーションをされていて、アサダ研究員の資料（38ページ参照）にある「突っ込み」を入れている状況が、まさにそこで見られました。
また竹内研究員は「創作のための素晴らしい環境」に驚き、軽視されがちな創作の環境が実際は創作される作品に大きく影響することを再認識されていました。
この見学会によって、これまで展覧会という展示スタイルの中で作品と向き合ってきた研究員のみなさんですが、創作現場の見学を経て、次ページ以降に続くアール・ブリュットの魅力発信手法についても少なからず影響が見られます。

Idea

アール・ブリュットの発信アイデア集

展覧会レビューや第1回・第2回の公開研究会、創作現場であるやまなみ工房の見学を経て、様々なアール・ブリュットの魅力が浮かび上がりました。そこで、それらの魅力を効果的に発信するための手法についてのアイデアを企画というカタチで考えました。研究員から多くの企画案があがりましたが、ここではその一部をいくつかのカテゴリにわけてご紹介します。

アール・ブリュットの魅力を展覧会などで伝える

この他にも、単独の作家にフィーチャーした個展の連続（シリーズ）開催や展覧会をカラダで鑑賞するためのワークシートづくり、展覧会レビューでも話題にあがった写真のコンテストなど多くのアイデアが出ました。

TITLE 「素材」の展覧会
WHERE 美術館・ギャラリーなど
WHO 展覧会主催者など
WHEN 展覧会開催にあわせて

先のアール・ブリュットの魅力としてもあがっていますが、作品と出会った時にかき立てられる創作意欲の向かう先という意味で、作品と一緒に材料が展示してあってファクトリーコーナーのようになっているとおもしろいのではないかと考えました。展示に触発されて制作が起こり、それをまた展示できるようなスペースがあって、またそれを見て他の人もつくってみたくなる、というようなサイクルができると展覧会に来た方も参加して、その痕跡を残せてよいと思います。

［アサダワタル］

TITLE 展覧会「アートと障害」
WHERE 美術館

ダウン症・自閉症…、数々の障害があるのにその実態をよく知らなくて情けなく思うことがあります。第1展示室では作品展示、第2展示室では障害の実状や福祉体制の問題点など、踏み込んだ現状レポの2本立てで表現します。何が作品でどこから制作なのか、そしてまた治療行為でもあるのか、鑑賞に加えて様々な問題定義の場として提示する企画展です。僕は前回の研究会でアール・ブリュットを定義することが煩わしくて面倒くさいということを話しましたが、そもそも「アール・ブリュット」というのは問題含みな定義でありジャンルなので、それを伏せたまま進んでいくのが気持ち悪くて、発展的な議論の中で逆行するようですが、そういう展覧会が美術館であるとよいなと思います。

［竹内厚］

TITLE さわれる アール・ブリュット作品展
WHERE 美術館・公共施設など
WHO 展覧会主催者など
WHEN 展覧会開催にあわせて

パワフルなアール・ブリュット作品の魅力に、文字通り「ふれて」もらう展覧会。アール・ブリュット作品の中には「ふれてみたい」というどうしようもない衝動にかられるものもあります。特に陶芸作品などは質感や重さ、肌触りというのが非常に大きな要素なので、実現は難しいかもしれませんが、ふれてもよい作品を用意したり、予約制で1人ずつ順番にするなどして目の届く範囲でさわってもらえる機会などあれば、作品や作家への理解も深まると思います。

［山口真有香］

アール・ブリュット関連書籍

絵本以外にも、月刊「プライベートコレクション」と題した各界の著名人が選ぶ作品選集や子どもの「何だこれ？」を引き出す絵本のアイデアなども出ました。

TITLE 絵本 「食わずぎらいはアカンで！」

作品写真と短い言葉や詩のついた写真絵本のアイデアです。分冊のシリーズもので、これまでアール・ブリュットを敬遠してきた人に向けておしゃれで読みやすいものになれば、と思います。

［鳥井新平］

アール・ブリュットをより身近で日常的なものに

この他にも、アール・ブリュット作品をファッションに取り入れる「まとうアール・ブリュット」や銭湯の壁面にアール・ブリュット作品を起用する「富士山なんてもう古い」、紙幣のデザインに取り入れる「生の通貨」など斬新なアイデアが多数ありました。

TITLE アール・ブリュット・コラボレーション
WHERE どこでも WHO 誰とでも WHEN いつでも

作品を世に出していく時に、やはり福祉施設の職員では限界があり、今美術の分野で学芸員の方などに興味をもってもらって展覧会などに展開してきています。作品や作家の可能性を拡げる目的で、デザイナーや音楽家、映像作家など異分野の方に作品や作家をコーディネートしてもらう企画です。共同制作ではなく、展示や発信など多様な視点で切り取ってもらうことで展覧会とは違った見せ方ができるのではないかと考えました。

［早川弘志］

TITLE サロン・de・阿武（あぶ）（アール・ブリュット）
WHERE 美容室 WHO 美容院
WHEN 常時

周りの調度品や絵画がすべてアール・ブリュット作品という1席だけの予約制美容室。美容師は、アール・ブリュットコンシェルジュでもあり、さりげない作品解説や展覧会情報などで会話を紡いでくれます。

［アサダワタル］

創作の現場を見に行こう

類似の企画内容で、美大生などに向けて自由な創造性を目の当たりにしてもらい自らの創作意欲をさらに高める目的の「モチベーションセンター」という現場見学の企画もあがりました。

TITLE ○○遠足
WHERE アトリエ WHO 作業所

創作現場を見に行くツアーを実施します。見学とか視察ではとっつきにくいので、たとえば「やまなみ遠足」みたいな感じで施設名を入れてタイトルとします。単に施設を見学に行くだけでなく、道中は愉快で即興力のある劇団員が添乗員を務め、途中、作家が乗り込んでくるなどハプニングなども。福祉関係者や美大生向けにいろいろな作業所編を企画し、展開できます。

［竹内厚］

アール・ブリュットについて知る

アール・ブリュットに関連する様々な取り組みが実践されてきています。発展的な取り組みと平行して、一方で、今一度アール・ブリュットについて改めて知るための企画アイデアが出ました。

TITLE アール・ブリュットファシリテーター養成講座
WHERE NO-MAなど WHEN 年2回程度

アール・ブリュットの魅力を発信・解説できる人材の発掘と養成が今求められています。環境教育の分野ではこのファシリテーターの取り組みが成功しているので参考になると思います。

［鳥井新平］

TITLE はじめてのアール・ブリュット講座
WHERE 公共施設大学など
WHO 自治体、美術館、ギャラリーなど WHEN 常時

美術ファンには勉強家が多いので、「アール・ブリュット」という言葉は知っていても鑑賞のための1歩を踏み出せない人向けの講座。展覧会との連動や独立した開催などが考えられます。

［山口真有香］

TITLE 特別支援学級（学校）×アール・ブリュット
WHERE 特別支援学級（学校） WHEN 常時
WHO 特別支援担当教員や保護者など

障害とのつながりと子どもたちの視点や可能性を引き出す場として特別支援教育にアール・ブリュットを取り入れてはどうかと考えました。それに伴って、鳥井研究員の言われるように特別支援担当教員や保護者が必ずファシリテーターとして教育を受けることができるとよいと思いました。

［近藤隆二郎］

アール・ブリュットについて語り合う場所

「アール・ブリュット」の認知度の高まりや成熟に伴うアイデアです。アール・ブリュットについての理解を深め、さらに展開するために重要なアイデアです。

TITLE アール・ブリュットをレビューしよう！
WHERE 美術館・ギャラリーなど
WHO 展覧会主催者など
WHEN 展覧会開催にあわせて

展覧会の来場者にお気に入りの作品などについて語ってもらい、それぞれの人が感じるおもしろさなどを紹介しあう企画です。付せんのようなものに書いて壁などに貼りだすという方法でもよいと思います。

［山口真有香］

TITLE のもNO-MA
WHERE どこでも　WHO だれでも
WHEN いつでも

福祉関係者の中にも「アール・ブリュット」に対する違和感を持ったりや反発をする方もおられます。そういった人たちも交えて、本音で語り合い、ぶつかり合えるような場があることは重要と思います。

［鳥井新平］

TITLE アール・ブリュット ラウンドテーブル
WHERE どこでも　WHO 誰でも　WHEN いつでも

全国のアール・ブリュットに関心を持つ人のしゃべり場。5〜6人の少人数グループをいくつもつくってたっぷり語り合う豊かな時間を持てればと思います。

［鳥井新平］

付記：この研究会が発展し、拡大していけば鳥井研究員のいうラウンドテーブルになりそうですね。

［アサダワタル］

アール・ブリュットの発展的可能性

アール・ブリュットの多面性を象徴するように本当に多岐にわたるアイデアが出ました。この他にも、信仰（宗教）や現代的な社会問題解決の糸口としてアール・ブリュットを活用するような企画もありました。

TITLE アール・ブリュット百科づくり ーパタンランゲージをめざしてー
WHERE ウェブ（WWW）

Wikiサイトのように多くの人々で共同編集され、常に情報が集約・更新されていきます。「織る」「切る」「つける」「たたむ」「塗る」「つまむ」など、創作行為によって体系的に分類・整理し、その先に作品や作家を関連づけます。多忙な社会で疲れた体をリセットする手引書であり、自分の体にあった創作行為を指南してくれます。ヨガやスポーツクラブのように発展する可能性も包含しています。

［近藤隆二郎］

TITLE アール・ブリュット サウンドスケイプ
WHERE ラジオ放送　WHEN 週1回　WHO ラジオ局

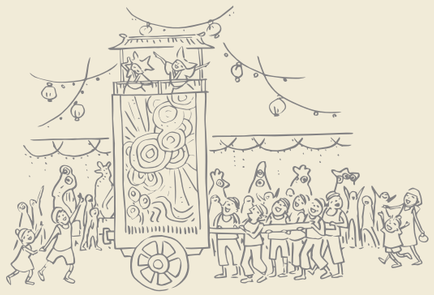
「音」でアール・ブリュットを伝えるということを考えました。制作時の音を録音したサウンドロゴ、音声による作品解説、精神病院や福祉施設などの制作現場のサウンドスケイプをラジオ番組として放送する企画です。あえて音だけで伝えることで全く違う発見や体感ができるのではないかと思います。

［アサダワタル］

TITLE 祭だ ワッショイ！
WHERE 全国の祭　WHO 作家有志

地域（町）の文脈にアール・ブリュットを根付かせていくために、たとえば祭への展開を考えます。制作班とパフォーマンス班の2班構成で祭部隊を結成し、みこしや山車のある祭限定で全国の祭を巡ります。

［竹内厚］



From Now

アール・ブリュット魅力発信手法

第3回研究会では、これまでに整理してきたアール・ブリュットの魅力をいかにして伝えるか、その発信手法に的を絞って意見交換を行いました。そして、特定の分野・領域にかたよらない多様な研究員より、これだけたくさん発信手法のアイデアが企画案としてあがったことは、研究会としての非常に大きな成果です。また内容についても、展覧会レビューでの課題意識を発端とした展覧会におけるオプションプログラムや、第2回の公開研究会で発表のあったアール・ブリュットに関する取り組み事例のように、より身近な場でアール・ブリュットとの接点を持たせるような企画、さらには魅力発信のための人材育成や普及のためのアイデアなど、本当に多岐にわたっています。多くのアイデアは具体化するために様々な課題や現実的な問題をクリアしながら進めていく必要がありますが、これらの企画を案のまま終わらせず、1つずつでも実現していくことでアール・ブリュットの魅力をさらに多くの人々に伝え、理解を深めてもらうことができます。そして、特に「アール・ブリュットについて知る」企画や「アール・ブリュットについて語り合う場所」の企画などはいずれもアール・ブリュットが認知され、ある程度成熟しつつあるからこそ出てきたアイデアとして語られています。「アール・ブリュット」という言葉を聞いたことがある、あるいは知っている人が増えたことでその解釈の幅も広がり、本来の意味とは少し違った捉えられ方をされることも増えてくることが予想されます。単純に広く知ってもらうための企画というだけでなく、このように認知の過渡期だからこそのアイデアが出たことは特筆すべきことではないでしょうか。

また、幅広い視点からアール・ブリュットについて語られ、実際に特定の分野に限定しない分野横断的な取り組みの糸口を企画案として見いだせたことは、研究会の当初の目的を達成できたことに他なりません。3回という限られた回数の中でこうして目的を達成できたことはとてもよかったと思います。それから、この研究会そのものも44ページの左上にあげられているラウンドテーブルに対するアサダ研究員のコメントにある通り、まさにそのラウンドテーブルの原型であったと言えるでしょう。必要に応じて何らかカタチを変える必要はあるかもしれませんが、研究会自体もアール・ブリュットに関心を持つ多分野の交流の機会として継続することができれば、さらに踏み込んだ議論が可能となり、分野横断的な取り組みのきっかけとなることが十分に考えられます。

この研究会の成果を活かし、様々な主体が共働してアール・ブリュットに関連する取り組みがさらに展開されていくことを期待しています。

情報発信

Communication of Information

情報発信事業では、さまざまなメディアを活用し展覧会関連イベント・公開研究会開催情報の発信を行った。報道機関、美術関係者・福祉関係者を始めとするアール・ブリュットを知る人、広く一般、と主に3つのターゲットを想定した情報を提供。2011年11月から2014年3月までの約4ヶ月間に、多数の新聞やテレビ放送で取り上げられ、それらを目にして来場する方も少なくなかった。以下、実施内容をまとめる。

［実施内容］

□実施期間 2013年11月～2014年3月

1. ニュースレターの発行

報道機関向けに3回のニュースレターを発行。展覧会の見どころ、作家略歴、関連イベント登壇ゲスト情報などを掲載し、取材・露出機会の増加を目指した。結果、2013年11月下旬～2014年3月末までの約4ヶ月間に新聞、テレビ、雑誌などへの掲載・放映は把握できるものだけで約50件となった。（p47を参照）

2. Facebook・ウェブサイトによる情報発信

NO-MAのウェブサイト及びFacebookページに、展覧会設営風景や、関連イベント告知を掲載したほか、イベント開催中にはリアルタイムな情報発信を行った。また、「アール・ブリュット☆アート☆日本」展開催期間中には近江八幡市伝統的建造物群保存地区一帯の町歩き情報なども発信した。Facebookでは１つの記事に数十件、多いときには100件を越える「いいね」が寄せられた。

NO-MA公式サイト： http://www.noma.jp
□関連記事掲載：26件
□アクセス数：約18％アップ

Facebookページ： http://www.facebook.com/museumnoma
□関連記事掲載：56件
□アクセス数：約32％アップ
□いいね総数：1,191（2014年3月23日時点）

3. ラジオでのCM放送

KBS京都のラジオ番組「glow　生きることが光になる」（提供：糸賀一雄生誕100年記念事業実行委員会、毎週金曜日21:00～21:20放送）においてCM放送を実施した。一般向けの情報発信として、ラジオ放送を活用。ラジオ局の協力も得られ、その他複数の番組内にて告知やチケットプレゼントを行い、多くの聴取者から反響を得ることができた。
□期間：2013年10月～2014年3月
□オンエアー： 26回（1回あたり40秒のCM）

パブリシティー一覧

Publicity

2013年11月23日　NHK（滋賀ローカル）【「アール・ブリュット」作品展】
11月23日　朝日新聞 朝刊 滋賀面【「生の芸術」魅力知って 大津でアール・ブリュット展】
11月23日　中日新聞 朝刊 滋賀面【輝く個性 無限の創造性 大津でアール・ブリュット展】
11月26日　京都新聞 朝刊 1面【お店に異彩 鮮烈アート 大津パルコ】
11月26日　e-radio「charge!」
12月3日　読売新聞 朝刊 滋賀面【「生の美術」10作家発信 障害者ら創作 大津で作品展 陶芸や絵画など180展】
12月3日　びわ湖大津経済新聞【大津でアール・ブリュット展－知的障がい者などの作品の魅力を発信】
12月13日　産経新聞 朝刊 滋賀面【アール・ブリュットの発信探る 大津 分野横断で意見交換】
12月16日　びわ湖大津経済新聞【大津で「アール・ブリュット」公開研究会－多彩な分野から研究員】
2014年1月1日　毎日新聞 朝刊 滋賀面（特集）【「生の芸術」湖国で開花 糸賀生誕100年 遺言今に】
1月1日　産経新聞 朝刊 滋賀面（連載）【アール・ブリュット 鼓動を象る 滋賀から世界へ〈1〉突き刺す造形 世界のサワダ 沢田真一（31）＝草津市】
1月1日　産経新聞 朝刊 滋賀面【「生のままの芸術」今年大きく飛躍 国の支援本格化】
1月1日　滋賀報知新聞【滋賀のアール・ブリュットたち 新春特集 誌上美術館】
1月3日　毎日新聞 朝刊 滋賀面（連載）【アールブリュット 価値観への挑戦〈1〉「風穴 開けたい」逆輸入で国内外の評価 澤田の創作支える周囲】
1月3日　産経新聞 朝刊 滋賀面（連載）【アール・ブリュット 鼓動を象る 滋賀から世界へ〈2〉藍と白 変幻自在の「糸絵」萩野トヨ（75）＝湖南市】
1月4日　毎日新聞 朝刊 滋賀面（連載）【アールブリュット 価値観への挑戦〈2〉眠った才能 調査本腰 半世紀経て「宝発掘」自ら賞状書き続けた画家】
1月4日　産経新聞 朝刊 滋賀面（連載）【アール・ブリュット 鼓動を象る 滋賀から世界へ〈3〉緻密な描線「世界」を創造 古久保憲満（18）＝東近江市】
1月5日　毎日新聞 朝刊 滋賀面（連載）【アールブリュット 価値観への挑戦〈3〉専門性生かして連携 偏見社会 変えたい 付加価値高め 作家に還元】
1月5日　産経新聞 朝刊 滋賀面（連載）【アール・ブリュット 鼓動を象る 滋賀から世界へ〈4〉永遠の「未完成」コピーアート 辻隆行（31）＝東近江市】
1月6日　毎日新聞 朝刊 滋賀面（連載）【アールブリュット 価値観への挑戦〈4〉ありのまま受け止めて「正解」のない社会 多様な意見 教育に活用】
1月7日　毎日新聞 朝刊 滋賀面（連載）【アールブリュット 価値観への挑戦〈5〉現実の厳しさ 今も 多くの芸術家 輩出 広がるか自立への道】
1月7日　京都新聞 朝刊 社会2面（連載）【アウトサイダー〈4〉世界へ出た「トゲ」が垣根を払う 本音の表現 国動かす】
1月31日　chekipon キタヒガシ版 vol.4【News＆Topics】
1月31日　滋賀報知新聞【今、注目のアール・ブリュット 大津市でフォーラム、展覧会 嘉田知事、青柳文化庁長官ら】
2月1日　れいかる3・4月情報号【イベントカレンダー】
2月8日　産経新聞 朝刊 滋賀面【〈アールブリュット 滋賀〉大作「仮想の街」国内初披露 大津で開幕、日台の360点共演】
2月8日　毎日新聞 朝刊 滋賀面【障害者 豊かな完成 あすまでフォーラム 展覧会 同時開催】
2月8日　京都新聞 朝刊 滋賀面【アール・ブリュット 日台から360点】
2月14日　読売新聞しが県民情報【古い町並みで芸術鑑賞 来月1～23日 35作家500点超】
2月19日　Lmaga.jp【小吹隆文が選ぶ2月のスペシャル展覧会 その1「アール・ブリュット☆アート☆日本」】
2月21日　新美術新聞 3面【「レポート」アール・ブリュット ネットワーク フォーラム2014 発足1周年 基調対談「なぜ今アールブリュットなのか」】
3月1日　関西テレビ
3月2日　産経新聞 朝刊 滋賀面【〈アールブリュット 滋賀〉独創的な芸術作品1077点 作品展開幕 近江八幡 個性に合わせ展示工夫】
3月2日　MSN産経west ライフ【「アール・ブリュットは社会を変える」日比野克彦さんが講演 滋賀・近江八幡の伝建地区での作品展で】
3月2日　中日新聞 朝刊 滋賀面【35作家の純朴な完成 アール・ブリュット展開幕 近江八幡】
3月6日　WEBキャッフィーのびわブロ【アール・ブリュット☆アート☆日本】
3月6日　WEBドリームアーク【「アール・ブリュット☆アート☆日本」近江八幡で開催－】
3月7日　京都新聞 朝刊 滋賀面【アール・ブリュット 1077点集合 幅10メートルの大作、町家生かした配置… 市内8ヵ所で展覧会 近江八幡】
3月7日　毎日新聞 朝刊 滋賀面【力強い「生の芸術」6会場1077点 展示に工夫 23日まで アール・ブリュット作品展】
3月8日　京都新聞 朝刊 美術面【アール・ブリュット☆アート☆日本 境界超え世界とつながる】
3月9日　滋賀ガイド！【1077点のアール・ブリュット作品が大集合！「アール・ブリュット☆アート☆日本」（滋賀・近江八幡市）】
3月9日　びわ湖放送「ニュースCATCH」【町屋でアール・ブリュット展】
3月9日　ZTV【はちすま！街角情報箱「アール・ブリュット☆アート☆日本」】（～3月15日まで放映）
3月12日　NHK「おはよう関西」「おうみ発610」【伝統の町並みで"いのちの芸術"を】
3月14日　毎日新聞 朝刊 文化面【カルチャーインサイド：概念誕生から70年、障害者アートの今「アール・ブリュット」高まる注目】
3月20日　読売新聞 朝刊 滋賀面【「生の芸術」独特の世界】
3月20日　読売新聞 朝刊 文化面【障害者美術　広がる行政支援】
3月24日　京都新聞 朝刊 社会面【糸賀一雄生誕100年「世の光」はいま 内なる輝き 価値観問う】

まとめ

Conclusion

本事業は近年注目されつつあるアール・ブリュットの魅力を広く発信することを目指し、美術館、商業施設、全国規模の福祉関係者ネットワーク、地域の文化・観光資源、地域住民など多様な主体との事業を実施した。アール・ブリュットを中心においた「多様な主体との共働」により、異なった領域や立場の団体・人々がつながり、誰もがアクセスできる芸術文化活動・生涯学習の場を創出することができたことは大きな成果である。

3つの展覧会の総観覧者数は延べ約4万人となり、多くの人にアール・ブリュットの魅力と触れていただく機会を提供できた。特に大津パルコや、近江八幡市街の町屋を使った2つの展覧会では、これまでアール・ブリュットに触れたことが無い方々へもその魅力を届けられたと言える。また、出展作家延べ73名、延べ展示作品1,437点であった。たくさんの福祉施設や、台湾とのネットワークにより数多くの作品を展示することができ、多種多様な表現があることを発信する展覧会となった。

公開研究会では多面的な視点からアール・ブリュットの魅力発信手法に関する多くのアイデアが得られた。アーカイブされたこれらのアイデアは、地域の文化・観光資源の活用モデルとして結実する可能性を持つものである。

これらの成果を礎にして、本実行委員会ではアール・ブリュットの魅力を発信する実践を継続していきたいと考える。

アール・ブリュット魅力発信事業実行委員会実行委員会

「アール・ブリュット ゾーン パルコ」

主　　催　アール・ブリュット魅力発信事業実行委員会
共　　催　大津パルコ
協　　力　しがトコ：滋賀のええトコ

「アール・ブリュット ランドスケープ―創造のカタチを一望する―」

主　　催　アール・ブリュット魅力発信事業実行委員会
共　　催　第18回アメニティーフォーラム実行委員会、NPO法人全国地域生活支援ネットワーク
特別協力　社会福祉法人愛成会、台灣身心障礙藝術發展協會-光之藝廊、台北市立大学・視覚藝術研究所蘇 振明教授

「アール・ブリュット☆アート☆日本」

主　　催　アール・ブリュット魅力発信推進事業実行委員会
協　　力　近江八幡まちや倶楽部、尾賀商店、株式会社まっせ、株式会社カネ吉ヤマモトフーズ、まちづくり近江八幡（かわらミュージアム指定管理者）、酒游舘、滋賀県立大学人間文化学部生活デザイン学科佐々木一泰研究室、同志社大学政策学部大学院総合政策科学研究科井口研究室、特定非営利活動法人ヴォーリズ建築保存再生運動一粒の会、Collection de l'Art Brut、Halle Saint Pierre、Raw Vision、NPO法人工房あかね、滋賀県立精神医療センター、（社福）大木会　もみじ・あざみ、（社福）かんな会　かんなの里、（社福）恵庭光風会 多機能型事業所 光と風の里 恵み野西、（社福）湖北会 湖北まこも、（社福）しがらき会 信楽青年寮、（社福）にじの会「にじアート」、（社福）みぬま福祉会 川口太陽の家 工房集、すずかけ絵画クラブ、（社福）やまなみ会　やまなみ工房、（社福）光林会るんびにい美術館、 NPO法人しみんふくし滋賀、八幡酒蔵工房
特別協力　株式会社 HIBINOSPECIAL、台灣身心障礙藝術發展協會-光之藝廊、台北市立大学・視覚藝術研究所蘇振明教授

多様な主体との共働によるアール・ブリュット魅力発信事業報告書
2014年3月31日発行

［制作・発行］
アール・ブリュット魅力発信事業実行委員会
ボーダレス・アートミュージアムNO－MA（社会福祉法人滋賀県社会福祉事業団）、滋賀県、近江八幡市、一般社団法人近江八幡観光物産協会、NPO法人はれたりくもったり、アール・ブリュットネットワーク、滋賀県施設合同企画展実行委員会

［発行責任者］
北岡賢剛
（アール・ブリュット魅力発信事業実行委員会 実行委員長／社会福祉法人滋賀県社会福祉事業団 理事長）

［構成］
田端一恵（社会福祉法人滋賀県社会福祉事業団 企画事業部 次長）

［デザイン］
木谷真人

［アール・ブリュット魅力発信事業実行委員会事務局］
社会福祉法人滋賀県社会福祉事業団企画事業部／2014年4月1日より社会福祉法人グロー
〒521-1311　滋賀県近江八幡市安土町下豊浦4837-2
TEL（0748）46-8100　FAX　（0748）46-8228

平成25年度 文化庁 地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業

©Shiga Prefectural Social Welfare Organization　2014 Printed in Japan